JOY NOVELS

書下ろし長編ミステリー

金塊船消ゆ

多島斗志之

金塊船消ゆ

昭和六十二年九月三十日　初版発行

著者　多島斗志之

発行者　増田義和

発行所　実業之日本社

本社　東京都中央区銀座一―三―九
〇三（五六二）二〇五一（編集）
TEL　〇三（五三五）四四四一（販売）
振替東京一―三二六　〒一〇四

支局　大阪市北区曽根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
TEL　〇六（三一一）一五七三

印刷　大日本印刷　製本　共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えします

ISBN4-408-50088-7

©T.Tajima　1987
Printed in Japan

JOY NOVELS

書下ろし長編ミステリー

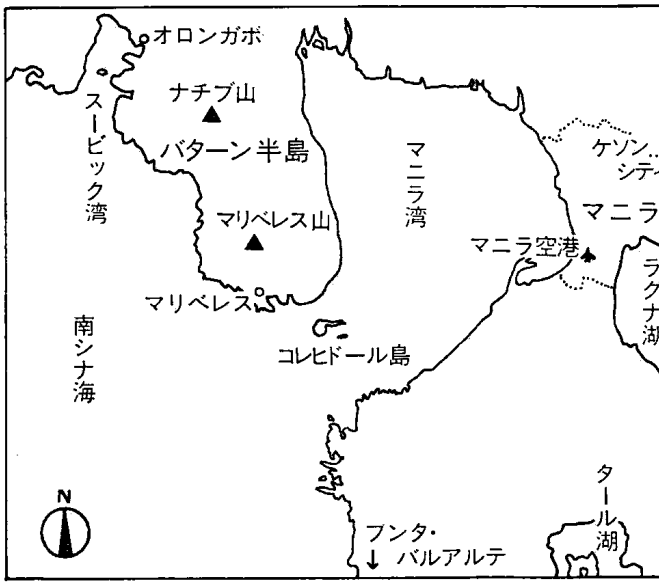
金塊船消ゆ

多島斗志之

実業之日本社

パズルは、単純そうに見えるほど、解いてみたくなるものだ。

——サム・ロイド
（アメリカのパズラー。一九一一年没）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

カバー絵／野中　昇
装幀／サン・プランニング

第一章

1

風のつよい日だった。

伊豆半島の西側。その付け根の街、沼津。河口の砂洲の上のひらべったい街だ。

潮気をふくんだ湿った風が、街の中を吹き抜けてゆく。

風にさからってペダルをこいできた郵便配達夫が、自転車にまたがったまま片足をついて、一通の封書を郵便受けに押し込んだ。鳥居印章店の郵便受けだった。

店の中から、ガラス戸越しにそれが見えた。

鳥居甚一は、作業机に拡大鏡（ルーペ）を置いて、フーッと息を吐いた。細かな削り屑が散った。ちょうど一本、彫り上がったところだった、黄楊（つげ）材の四角い社印だった。

目がしらをおさえて、しばらく揉む。

鳥居は六十七歳だった。

肩凝りのしない体質のおかげで、この歳になっても仕事が早い。しかし、目の衰えだけはどうにもならなかった。一本彫り上げると、しばらくは細かいものを見る気になれない。手紙の文字などはなおさらだ。が、誰から届いたのか、それだけは気になった。

鳥居は立ち上がって膝の木屑を払い、郵便受けから封書を取り出した。

封筒には、しかし差出人の名前がなかった。

そのくせ〈親展〉と書かれていた。

鳥居には家族はいない。わざわざ〈親展〉などと書く必要はない。それを知らない者からの手紙なのだ。

宛名広告（ダイレクト・メール）だろうか。そう思って、中身を確かめる

ために封を切った。
便箋が三枚だった。肉筆だった。
机に戻って眼鏡をかけた。最初の数行に目を通した。

光陰は矢の如しと申しますが終戦以来早四十年を越える年月が過ぎ去りました。比島に於いて共に生きぬいた辛酸の日々も次第に遠い記憶となりつゝあります。

〈比島〉――なつかしい文字だ。鳥居甚一は戦時中フィリピンにいた。
目の疲れを忘れて、鳥居はそのまま続きを読み進めた。角張ったぎこちない筆跡だった。

申し遅れましたが小生は貴兄と同じくサンタ・クララの飛行場大隊で警備第一中隊に所属していた者であります。名を名乗れば思い出して頂けるやも知れませんがそれは後日にゆずる事として、本状では姓名を伏せたまゝ用件を述べさせて頂きます。どうか御容赦下さい。
用件と申しますのは例の〝火〟の事であります。昭和十九年十一月六日暗夜、我々が焚いたあの〝火〟の事であります。貴兄も参加されたはずであります。あの〝火〟の意味も当然御承知のはずであります。関係者の中には、いまだに単なる噂に過ぎぬと思込んでおられる方もあるようですが、そうではありません。当時流れた噂はまぎれもない事実であります。小生はそれを断言することができます。
さて我々も既に老境に差掛かりました。当時の関係者も随分と減っております。このまゝ手をつかねていたのでは、あれは永遠に幻のまゝで終ってしまうのであります。そうならぬ内に関係者が集まり、是非共四つの火を再現しようではありませんか。互いの記憶を持寄ればそれが出来るはずであります。そしてその後の権利は参加者で等分するのが妥当であると考えるの

であります。本状の趣旨に御賛同頂けましたなら何卒万端繰合せて左記の会合に御出席下さるようお誘い申し上げる次第であります。

会合日時　十一月六日午後一時

会合地　マニラ・ホテル正面ロビー

尚、相互の目印として月刊エポック十二月号を持参のこと。

四つの火を再現する会　発起人（小生の姓名は会合地に於いて明らかに致します）

鳥居甚一様

文章は黒インクで書かれていたが、鳥居の名前の部分だけが、なぜかブルーブラックのインクだった。目を凝らしてよく見ると、その理由がわかった。文面は肉筆ではなく、じつはコピーされたものだった。送付相手の名前だけを肉筆で書き加えてあるのだ。

ということは、複数の相手に同じ文面を送っているのだろう。

封筒の消印を見てみた。東京の中央郵便局だった。

鳥居は、木屑の散った作業机の上に手紙を放り出し、魔法瓶に手を伸ばした。大きめの陶カップに、コーヒーを注ぐ。毎朝豆を挽いて淹れ、保温しておいて、仕事の合い間に何度も飲む。それが習慣だった。

ひと口飲んでは便箋を取り上げて読み返し、ひと口飲んではまた読み返した。

〈用件と申しますのは例の〝火〟の事であります。昭和十九年十一月六日暗夜、我々が焚いたあの〝火〟の事であります〉

〈是非共四つの火を再現しようではありませんか〉

〈会合日時　十一月六日午後一時〉

壁のカレンダーを見上げた。この日は十月三日だった。

2

東京は、風に加えて雨も降っていた。
横なぐりの雨だった。風と雨は夜まで続いた。
井の頭線の久我山駅から家までの七分間に、浅田かおるはスカートから下をすっかり濡らしてしまった。
かおるは二十五歳のOLだった。
生垣の中の小ぢんまりとした二階家が、彼女と父親の住まいだった。どの窓にも灯がともっていない。父はまだ帰宅していないようだった。
道路から石段をふたつ上がったところに玄関がある。かおるは錠をあけて、傘を畳み、郵便受けをさぐった。夕刊と、父親宛ての封書が入っていた。夕刊も手紙も、雨滴がしみ込んで湿っていた。
〈親展〉とある封書を、かおるは父の書斎の机に置いた。差出人の名はなかった。
父の浅田信弥は六十五歳だった。英文の翻訳業を営んでいた。自宅での仕事がほとんどだったが、週に二度は翻訳学校で講師をしていた。この日も講座のある日だった。
講座を終えたあとは、まっすぐ帰る日もあり、出版社の知人と飲んでくる日もあった。遅くなるときは必ず電話をしてくれる。
かおるは一人娘だった。母は十年前に死亡していた。乳癌だった。
「父さん、愛情が足りなかったんじゃない？」
七回忌のときに、二十一になったかおるが冗談めかしていったことがある。
父も苦笑いしていい返したものだ。
「ばかいえ。こう見えても、あのころのおれは歳の割りに頑張ってたんだ。しかし、母さんグラマーだったからな。気が付いたときには遅かった」
母の躰を追想するような目をして、父は痩せた頬を少し赤くした。
父とかおるとで、母に対してはできるだけのことをした。そういう思いが、ふたりの慰めになってい

た。
父との暮らしは、居心地がよかった。それもあって、かおるにはまだ決まった相手がいなかった。
最近、ときどき見合いの話が入ってくるようになったが、かおるは気が乗らなかった。父も同様だった。
かおると暮らす一日一日を、父のほうでもまだ終らせる気になれないようだった。彼女を束縛することは一切なかったが、結婚を急きたてることもしなかった。ぬるま湯の中の、おだやかな日々だった。
かおるは濡れた服を脱ぎ、ジーンズとサマーセーターに着替えて、夕食の仕度を始めた。
きょうは飲んでくるのかな。——料理の分量を迷っていると、チャイムが陽気な調子で鳴った。父の帰宅だった。
食事の用意ができた。
かおるは父の書斎のドアを開いて、それを告げた。
和服に着替えた父は、窓のところに立って外を眺めていた。外は暮れきり、しかも雨が降り続いていた。ガラスが鏡のようになって、室内の本棚と父の顔とを映していた。
かおるが声をかけても、父は気づかなかった。
「父さん、仕度できたわよ」
もう一度いうと、ようやく振り向いた。
「腹が減ってないんだ。悪いが、あとで食わせてもらうよ」
へんにかすれた声だった。
仕事机の上に、開封した封筒と、ひろげた便箋が置かれていた。かおるの目がなにげなくそっちを向いたとき、父はまるで自分の背中でそれを隠そうとでもするように、机に戻って腰を下ろした。
翌日は土曜日でかおるは休みだったが、父は、溜まっているはずの仕事を放り出して、朝から外出した。雨は上がっていたが、風はやはり強かった。
「どこへ？」
かおるが訊ねると、父は油っけのない白髪を額の前で揺らして靴を履きながら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「沼津だ」と答えた。「友だちに会ってくる」
「ああ、鳥居さんのところね」
沼津の鳥居甚一。父の戦友だ。かおるが知る限りでは、父が戦後も永く交際を続けている唯一の戦友だった。
毎年、賀状や暑中見舞いは欠かさず交換している。かおるも少女のころに二、三度会ったことがある。十年前の母の葬儀にも、沼津から上京して参列してくれた。それも憶えている。
おだやかな目元をした小柄な男だった。小柄だが、がっちりとした体格。長身で痩せ型の父とは対照的だった。そんな印象を憶えている。
「ハンコ屋さんの鳥居甚一さんね」
「そうだ。かれのところだ。……記憶力のいい子だ」
そういって父は微笑んだ。

3

鳥居甚一は、仕事机に坐って、ガラス戸越しに店の外を眺めていた。
風にあおられて、店先の吊り看板が揺れていた。注文を受けている仕事がないわけではなかったが、きょうはやる気になれなかった。ただぼんやりと外を眺めて、浅田信弥を待っていた。
昨夜、浅田から電話があった。鳥居のほうからかけようとした矢先だった。
「妙な手紙が届いたんだが」
浅田の声は憂鬱そうに沈んでいた。鳥居も同じような声で応えた。
「ああ、こっちにもだよ」
「やっぱりか」
「また、あの〈火〉だ。いやになるね」
「とっくに消えたと思っていたが」
浅田の吐息が受話器から流れてきた。
「誰だろうな、いったい」
鳥居がつぶやくと、すこし間があいてから、浅田がいった。
「あす、そっちへ行くよ」

「しかし、あんまり神経質になることもないと思うがね」
「前みたいな騒動はもうご免だ」
「またあんなふうになると思うのかい？」
「よくわからんが……久しぶりにきみの顔も見たいし」
「そういえば、ずっと会ってないな。よかろう、待ってるよ」

浅田の姿がガラス戸の向こうに現われたのは正午前だった。十年ぶりの再会だ。十年のあいだに、浅田の髪はすっかり白くなり、その白い長髪が風に乱れていた。

鳥居のほうは髪が頭頂部まで後退し、短かく刈り込んでいる。

店の入口は昔ながらの引戸だ。そのガラス越しに浅田が店の中を覗いた。外のほうが明るいので店内が見にくいのだろう、浅田はやや身をかがめ、額をガラスにくっつけるようにして覗いている。

鳥居は立ち上がって、冗談まじりに敬礼してみせた。悪趣味だといって、浅田はそれを嫌うのだが。

軍隊時代、鳥居は陸軍伍長で、浅田は少尉だった。

浅田の彫りの深い顔が、しかし笑った。笑ったときに浮き出た皺の多さが、鳥居をふと淋しい気持にさせた。

浅田はガラス戸を引き開けて、店内に入ってきた。

「おたがい、無精者だね。十年もごぶさただからね」

それが、浅田を迎えた鳥居の第一声だった。

戦時中の階級は将校と下士官だが、戦後は互いに対等の言葉づかいで付き合っていた。歳からいえば、むしろ鳥居のほうが二つ上だ。

「まったくだ。たいして遠くもないのにな」

浅田がまた微笑した。

老いた笑顔の中に、しかし昔のままの清潔感が残っていた。かれのこの不思議な清潔感だけは、何十年たってもそのままだ。戦時中も、浅田はおだやかな性格の将校だった。むやみに将校風を吹かせることもなく、兵隊たちから好感を持たれていた。

復員後はしばらく会うこともなかったが、昭和三十六年、例の〈火〉にまつわる騒動が、再び二人を結びつけた。騒動が決着したあとも、ときどき往き来していたが、十年前の鳥居の上京を最後に、それが途切れていた。互いの顔を見るのはそれ以来だ。

浅田は、飾り物の水牛の角を撫でながら、狭い店内をなつかしげに眺めていた。

ますます痩せたようだ。というよりも、枯れたようだ、というべきか。グレーの背広が、ハンガーにかかっているように見える。

「おろしたてだね。いい生地使ってる」

「外に出ることが少ないから、傷まんのだよ」

浅田は、いいながら、みやげの箱を印材ケースの上に置いた。

「ウイスキー？」

鳥居が訊いた。

浅田は自分で包装紙を剝いだ。リザーブだった。

「甚さんへのみやげは、これしかないだろう。今でもあのペースで飲ってるの？」

「まあね」

鳥居は、なぜか調子よく答えてみせたが、それは嘘だった。一昨年、胃の手術をしてから、酒量はごくわずかにおさえている。飲もうと思っても、もうとても以前ほどは飲めない。躰が受けつけなくなっていた。

「ま、とにかく奥へ上がんなさいや」

鳥居は浅田をうながした。

店の奥に、六畳二室と台所、トイレ、浴室があった。それが鳥居の住まいだった。一人暮らしには、それで充分の広さだった。

ふた部屋のうち、一室は寝室、一室は居間と、いちおう使い分けていた。

居間にはテレビと安物のサイドボード、そして座卓と座椅子がある。座椅子はふだんはひとつだが、きょうは浅田のために、もうひとつを押入れから出してあった。

向かい合って、二人は腰を下ろした。

中央の座卓の上に、封筒が置かれていた。

鳥居甚一宛ての、例の手紙だった。
それに視線を向けたまま、浅田が背広の内ポケットから自分宛ての封筒を取り出して、横に並べた。
二通の宛名の筆跡は同じものだった。
二人は互いの封書を交換して中身を読んでみた。やはり同一の文面だった。
〈……用件と申しますのは例の〝火〟の事であります。昭和十九年十一月六日暗夜、我々が焚いたあの〝火〟の事であります。貴兄も参加されたはずであります。あの〝火〟の意味も当然御承知のはずであります。……〉

4

鳥居と浅田の所属部隊がフィリピンへ送られたのは、昭和十九年七月だった。
門司で輸送船に乗せられて、十一日目にマニラへ着いた。七隻の船団のうち、途中で一隻が敵潜水艦の魚雷を受けて沈没した。
しかし、船団としては、これはまだ運のいいほうだった。かれらのすぐ前に出発した船団も、すぐあとから出発した船団も、ともに半数以上の船が沈められたという噂だった。
蒸し風呂のような船倉と船酔いに苦しめられながらも、とにかくかれらは無事にマニラに到着した。
下船後、競馬場に天幕を張った宿舎に収容された。そこで一週間をすごしたあと、おりからの土砂降りの中を、赤土のぬかるみを踏みしめながら、配属地サンタ・クララ飛行場へと向かった。
サンタ・クララ飛行場は、マニラ市の北東に新設中の航空基地だった。
兵舎の壁は竹で編まれていた。屋根は椰子の葉で葺かれていた。連日の雨で、兵舎のまわりもひどいぬかるみだった。
「これはまた、えらいところでありますな」
鳥居が、そばにいた浅田にいった。
浅田も苦笑したが、
「輸送船の船倉よりはいいではないか。脚を伸ばし

て寝られるだけ、ましというものだ」
かれらしい、まじめな応答をした。
しかし、翌日は久しぶりに空が晴れわたり、飛行場の周囲の田園風景が見ちがえるような美しさで鳥居の前にひろがっていた。
水田。バナナやマンゴーの葉蔭。その下でのんびりと動く水牛。背景に波打つ、なだらかな小高い山々の緑。
やがて訪れた見事な夕景に、鳥居は息を呑んだ。
「鳥居伍長、そう悪いところでもないではないか」
いつのまにか脇に立っていた浅田が、はずむような声でそういった。二十三歳の若い横顔が夕焼けに染まっていた。
そのときの浅田信弥は、まだ見習士官だった。学徒出陣で入営ののち幹部候補生となり、陸軍予備士官学校で半年間の教育を受けてきたばかりの、文字通りの将校見習いだった。見習士官にありがちの大げさな気負いも、浅田にはなかった。上官からはともかくとして、兵隊からは信用されるタイプの男だった。
「内地では見られん美しい風景だ」
鳥居はこころもち姿勢を正して、笑顔で応じた。
「自分もそう思うであります」
そんなのんびりした言葉を自然に交せるのも、相手が浅田であるからだった。
夜には木々のしげみの中で、蛍が点々と光っていた。

しかし、サンタ・クララの住民たちの気持は、その風景ほどのどかではなくなっていた。
この新設飛行場のために、農地の半分がつぶされていた。植えつけた稲が滑走路の下に埋められるのを、かれらはなすすべもなく見守っていた。
そのうえ、埋め立てをまぬがれた水田の収穫も、紙屑のような軍票と交換に、すべて日本軍が徴発してしまった。輸送船を片っ端から沈められて、軍の食糧も不足していたのだ。
鳥居の部隊でも飯盒一杯の米飯を八人で分けて食

べている状況だったが、サンタ・クララの住民たちは、もはや一粒の米すら口にできないでいたのだ。
軍の窮乏にも増して、住民の生活苦は深刻だった。これでは日本軍に敵意を抱かぬほうが不思議だった。かれらはアメリカ軍の上陸を待ちこがれていた。その様子が鳥居たちにもはっきりと感じられるのだった。
飛行場周辺にゲリラが出没し、歩哨が射殺されることもあった。
マッカーサーがまもなくフィリピンへ上陸してくる。その気運がゲリラを元気づかせていた。
そして九月になった。二十一日の朝だった。低くたれこめた雲の中から、米軍機動部隊艦載機の大編隊があらわれ、マニラへの空襲が始まったのだ。
さらに一カ月後、米軍はついにレイテ島に上陸した。これを叩くために出撃した連合艦隊は、逆に決定的な打撃を受け、レイテ防衛の陸軍部隊も壊滅まぢかとなった。
台湾経由で本土から飛来した日本軍の航空部隊が、サンタ・クララ飛行場からも次々に南へ飛び立っていったが、ほとんどの機が帰還しなかった。
次はいよいよこのルソン島だ。ルソン島へ米軍が上陸してくる。軍の参謀ならずとも、兵隊はみなそう覚悟していた。
例の〈四つの火〉を焚いたのは、ちょうどそんな状況の中でだった。

5

十一月六日午前七時二十分、この日の第一波の空襲があった。
敵編隊の主力はいつものようにクラーク飛行場をめざしたが、一部がこのサンタ・クララ飛行場にも襲いかかってきた。
空色に塗られた翼の裏側。青い円の中の白い星章が、くっきりとあざやかに見えた。
一機また一機と鋭い角度で降下してくる。低空で反転した直後、重い地響きが一帯に轟き、赤黒い煙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton